

岩手県における高等学校家庭科の戦後史(第4報)

—ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動(その1)—

清水 房*・工藤澄子**・大森 輝***

(1981年10月15日受理)

はじめに

先に我々は主題にそって「学科の変遷」を第1報とし、第2報は「教育課程の変遷」、第3報は、「施設・設備、担当教員、現職教育」を取り上げ報告している。

本報文は戦後の高等学校家庭科教育推進の中心的役割を果たしてきたと思われるホームプロジェクト(以下H・P¹⁾と記す。)と学校家庭クラブ活動(以下S・P²⁾と記す。)の変遷を辿ることとする。H・PもS・Pも共に経験主義を基盤とする問題解決学習ではあるが、かたや前者は個別化の原理をふまえているのに対し、後者は社会化の原理に立脚している。まさに個と全体のバランスの上に家庭科教育を支え、推進しつつ現在に及んでいる。そうしてその都度取り上げてきた課題は、各時点において家庭生活が直面した切実な問題であり、解決の過程には本教科の基底をなす家政学研究成果は勿論のこと、あらゆる分野の科学を導入して、生活の改善向上をめざして実践している。

我々はこの点に着目して岩手県高等学校家庭クラブ連盟の機関誌第1号(昭和27年度)から第27号(昭和53年度)までを中心資料として、領域別に検討・考察し、(その1)として被服領域と食物領域の一部とを報告する。

I 岩手県高等学校家庭クラブ連盟結成まで

(1) 実験学校の発足

全国で16校指定 わが国の高等学校家庭科教育にH・Pが導入された経緯については、既報³⁾に述べたとおりアメリカのミセス・ドラエス・ルイス(Mrs. Dora S. Lewis)の指導によるもので、昭和23年度最初の文部省指定校は全国16校である。その中に東北地区から1校一岩手県立盛岡高等学校(現盛岡第二高校)が指定されている。昭和23年から26年までの全国の指定校は1—1表のとおりである。

昭和23年10月11日付の文部省からの予算内示をうけて、県では急ぎ、12月14日から18日にかけて開かれた定例県議会に議案第1号として、昭和23年度岩手県歳入歳出追加更生予算を提案し、〔款項〕5. 国庫支出金、〔目〕(2)教育費補助金、〔節〕ホーププロジェクト設備補助 35,000

* 岩手大学教育学部

** 郡山女子大学

*** 岩手県立盛岡短期大学

1-1表 家庭科ホームプロジェクト研究指定高等学校

(昭和23年～昭和26年)

都道府県名	23 年	24 年	25 年	26 年
北海道	道立札幌女子高校 道立帯広女子高校 旭川市立女子高校	道立札幌女子高校 旭川市立女子高校	道立札幌女子高校 道立帯広三条高校	
青森		県立弘前女子高校	県立弘前中央高校	県立弘前中央高校
岩手	県立盛岡高校		県立盛岡高校	県立盛岡高校
宮城			県立第一女子高校	県立第一女子高校
秋田		県立秋田北高校	県立秋田北高校	県立秋田北高校
山形		県立山形第三高校	県立鶴岡第三高校	県立鶴岡第三高校
福島			県立郡山女子高校	県立郡山女子高校
茨城			県立土浦第二高校	県立土浦第二高校
栃木	県立宇都宮松原高校	県立宇都宮松原高校	県立宇都宮松原高校	
群馬		県立前橋女子高校	県立前橋女子高校	
埼玉			県立春日部女子高校	県立春日部女子高校
千葉	県立千葉女子高校		県立長生第二高校	県立長生第二高校
東京	東京女高師附属高校 都立第四女子高校	東京女高師附属高校 都立第四女子高校	都立富士高校	都立白鷺高校
神奈川			県立小田原女子高校	県立小田原城内高校
新潟	県立新潟女子高校	県立新潟女子高校	県立新潟中央高校	
富山			県立高岡西部高校	県立新湊高校
石川				県立小松高校
福井		県立武生高校	県立武生高校	県立武生高校
山梨			市立甲府女子高校	市立甲府女子高校
長野		県立上田染谷高校	県立上田染谷高校	県立上田染谷高校
岐阜	県立高山女子高校	県立高山高校	県立高山高校	
静岡			県立磐田北高校	県立磐田北高校
愛知		県立刈谷高校	県立刈谷高校	県立豊橋時習館高校
三重	県立亀山高校		県立亀山高校	県立亀山高校
滋賀				
京都			府立朱雀高校	府立朱雀高校
大阪			府立桜塚高校	府立桜塚高校
兵庫		県立夢之台高校	県立夢之台高校	県立夢之台高校

奈良	奈良女高師附属高校 県立桜井高校	奈良女高師附属高校 県立桜井高校	県立田原本高校	県立田原本高校
和歌山		県立桐蔭高校	県立桐蔭高校	県立桐蔭高校
鳥取	県立鳥取第三高校		県立倉吉高校	県立倉吉高校
島根		県立出雲高校	県立出雲高校	
岡山		県立笠岡高校	県立岡山操山高校	県立岡山操山高校
広島			県立呉宮原高校	県立呉宮原高校
山口			県立山口高校	県立山口高校
徳島			県立城南高校	県立城南高校
香川			県立普通寺第一高校	県立普通寺第一高校
愛媛	県立松山女子高校	県立松山第二高校	県立松山北高校	
高知		県立佐川高校	県立佐川高校	県立佐川高校
福岡			県立小倉西高校	県立小倉西高校
佐賀			県立鹿島高校	県立鹿島高校
長崎		県立島原高校	県立諫早高校	県立諫早高校
熊本			県立山鹿高校	県立山鹿高校
大分		県立大分第一高校	県立大分第一高校	県立上野カ丘高校
宮崎	県立大宮高校	県立大宮高校	県立大宮高校	県立高千穂高校
鹿児島			県立甲南高校	県立甲南高校
計	16校	25校	45校	38校

（備考 24年以降は、都道府県の申請に基づくものである。）

（注）家庭科ホーム・プロジェクトの手びき 文部省（昭和27年5月5日発行）

円が、12月18日付で修正可決されている。

（2）実験学級

最初に選んだH・P 昭和23年11月に発足した実験学級⁹⁾の生徒28名が、はじめて選んだ題目は第1—2表のとおりで、第1学年の第二学期の教科内容が第1—3表に示したように被服領域であることから、被服に関連したH・Pとなっている。殆どの題目が更生利用を目的とした技術プロジェクトで占められていて終戦間もない当時の窮迫した家庭生活の実態が伺われる。

実施状況 当時のH・P実施状況については実験学校の「ホームプロジェクトの栞（昭和23年12月）」につきのように記されている。

実験学級実施記録（12月3日現在）

①実験学級編成；第1学年D学級（家庭コース）より生徒の希望、家庭の協力を条件として28名を選抜編成す。（11月1日）

1-2表 実験学級¹⁾生徒の家庭科ホーム・プロジェクト選択題目一覧表

(昭和23年12月7日現在)

生徒氏名	選 択 題 目 ²⁾
1 I	①私のズボンはどうな型が適当か ②足袋の更生
2 E	①足袋にはどんな布が適当か ②足袋の洗たく ③足袋の新調 ④足袋の修理
3 O	①毛糸の性質 ②セーターの型はどのように変遷してきたか ③セーターの更生
4 K ₁	①乳幼児の被服目録作製 ②乳幼児の被服作製
5 K ₂	①ズボンの修理と洗たく
6 K ₃	①個性とスタイルについての研究 ②足袋の修理 ③くつ下の修理
7 K ₄	①手袋の作製
8 K ₅	①オーバーの更生
9 K ₆	①足袋の洗たく ②足袋の更生及び新調 ③靴下の修理
10 S ₁	①私の下着はどうな型がよいか ②スリッパの製作 ③ズボンの研究
11 S ₂	①オーバーの更生
12 S ₃	①縮入チョッキ
13 S ₄	①毛糸の性質 ②セーターの型はどのように変遷したか ③セーターの更生
14 S ₅	①足袋にはどんな布が適当か ②足袋の洗たく ③足袋の修理, 新調
15 T ₁	①被服目録作製 ②古靴下の洗たく ③靴下の修理 ④靴下作製
16 T ₂	①私のズボンはどうな型が適当か ②ズボンの作製
17 T ₃	①私の下着はどうな型が適当か ②スリッパの作製 ③ズボン下, シャツの作製
18 T ₄	①足袋の更生新調, 洗濯 ②弟のジャンパー作製
19 T ₅	①足袋の分類, 目録作製 ②足袋の修理及び新調
20 N ₁	①被服目録作成 ②エプロン作製
21 N ₂	①足袋の作製
22 F ₁	①私のズボンはどうな型が適当か ②足袋の修理更生
23 F ₂	①現在所有の被服目録作成 ②セーターの作製
24 F ₃	①被服目録作成—現在の数, 理想設計, 不足目録 ②エプロン作製 ③スリッパ作製
25 F ₄	①半オーバーの更生 ②シャツの修理
26 M	①古い足袋の切れ方についての研究 ②足袋の更生, 新調
27 Y ₁	①古い足袋の切れ方についての研究 ②足袋の更生, 新調
28 Y ₂	①足袋の洗たく ②足袋の分類 ③足袋の修理, 新調

註 1) 第一学年在籍生徒の中から主旨に賛同する家庭の子女28名で編成した学級

2) 生徒の希望と教科内容とを考え合わせて「被服」に関するホーム・プロジェクトとした。

②生徒の希望と教科内容とを考え合わせて今学期は「被服」を取り上げる。

③課題選定; 個々に問題を家庭と相談の上選定させる。更に問題解決の研究計画を立てさせる。—第2表参照—(11月5日)

④研究グループ編成; 共通性のある課題を選んだ生徒によるグループを編成する。生徒の住所分布図を作成する。(11月5日)

⑤家庭訪問; 第1回…学校に近い家庭を訪問する。4家庭対象(11月6日)

第2回…研究グループにより実習。2グループ10家庭対象(11月13日)

第3回…同上, 2グループ9家庭対象(11月20日)

⑥担当教師と生徒の協議; 週1~2回。個々の生徒の進度表の調整と協議を行う。

⑦評価; 1つのH・Pが完了した都度生徒の父兄, 生徒自身及び教師の三者協議の上, どれだけ家庭生活に役立ったかという観点から評価し, 個票に記入する。

⑧記録提出; 生徒の記録は週一度提出。

1-3表 家庭科ホーム・プロジェクト実験学級教科内容

第一学年	第一学期 食 物	a 食物の必要 b 食物の栄養及び配分 c 食物の衛生 d 食物の加工及び貯蔵	e 燃 料 f 食事礼法給仕 g 家庭菜園 h 育 児 食
	第二学期 被 服	a 私達の服装はどうあるべきか b 被服生活の現状と改善 c 被服の変遷	d 製作 自分→家族→社会 e 被服の手入保存
	第三学期 育 児	a 母体の栄養と母乳の必要 b 育児の考え方, よい習慣とは c 一般予防医学	d 妊 娠 e 分 娩
第二学年	第一学期 住 居	a 住居の機能（住居衛生） b 住居の選定 c 平面計画 d 住居設備及び装美	e 住宅管理 f 住居の清掃, 手入保存 g 庭 園 美
	第二学期 家事経 理	a 家庭生活を如何に楽しむか（家庭生活の価値, 認識, 準備, 時間と労力） （家務の処理, 分担, 計画, 整頓, 記録, 設備） b 家庭経済と社会（収入, 支出, 予算生活, 家計簿, 貯蓄）	
	第三学期 家族関係	a 成長, 発育 b 性 教 育	c 結 婚 d 職 業 指 導

註) 昭和23年12月「ホーム・プロジェクトの榮」岩手県立盛岡高等学校 P. 2

⑨研究発表会；月一回。

なお当時は週五日制をとっており、毎週土曜日をH・P実施の日として生徒は家庭において学習し、教師は家庭訪問指導の日に当てたのである。

(3) 全県への普及

ガイドブック作製 岩手県教育委員会は実験学校の実績をもとに、昭和26年4月に「家庭科 Home Project Guide Book」という生徒対象の小冊子を出版し、全県の高等学校に配布し、この指導方法の普及に役立っている。目次はつぎのようなものである。

- 1 家庭科ホームプロジェクトとは
- 2 どのように勉強するか
- 3 問題のえらび方
- 4 実施計画のたて方
- 5 記録のつけ方
- 6 家庭訪問
- 7 問題例
- 8 記録例
- 9 結 び



家庭訪問指導

1-4表 岩手県高等学校家

区分	学校名	年度												
		昭27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
公	盛岡第一													
	盛岡第二		333		430	210	210	250	250	250	250	250	250	250
	盛岡第三													
	盛岡第四													
	盛岡北陵													
	盛岡農業		46		32	32	37	34	40	42	30	35	80	98
	盛岡工業		65		50	38	31	40	39	30	9	2		
	盛岡商業		67		42	13	44	91	105	50	45	25	25	50
	沼宮内				35	10	26	15	20	15	19	16	30	41
	葛巻					33	33	50	63	55	50	38	52	40
	平舘													
	雫石													
	紫波		247		120	150	150	150	130	130	125	125	126	127
	計													
	花巻北													
花巻南											40	40	50+18宛	
花巻農業				148	148	147	137	137	135	159	203	244	59+20宛	
花北商業														
大迫				31	30	50	32	35	30	32	30	38	52	
東和				72	74	90	75	105	92	105	142	215	245	
計														
黒沢尻北														
黒沢尻南														
北上農業				100	110	120	130	100	103	125	159	192	226	
黒沢尻工業		85		90	90	90	90	90	73	75	75	60	35	
西和														
計														
水沢		260		128	120	120	120	145	120	100	100	100	100	
水沢農業		262		270	258	262	276	284	273	259	253	255	—	
水沢工業														
水沢商業				39	75	103	75	68	69	75	91	74	91	
前沢				46	69	87	90	99	51	59	58	60	87	
金ヶ崎														
胆沢														
計														
岩谷堂		124		130	139	119	148	146	125	144	173	—	—	
岩谷堂農林												204	252	
江刺														
計														
一関第一														
一関第二		131		152	111	96	103	86	92	150	267	100	150	
一関農業														
一関工業														
花泉		145		105	100	109	105	104	107	125	160	96	48	
計														
大東				75	142	150	105	150	140	75	76	100	276	
大原商業														
藤沢				55	82	90	90	30	35	35	36	35	45	
千厩		289		234	222	270	290	221	153	180	195	227	257	
千厩農業														
計														

立

庭クラブ連盟会員数

(単位 人)

40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
250	250	250	250	245	240	230	275	270	225	281	272	270	276	552	557
50	100	100	100	112	200	216	186	163	150	145	131	134	166	178	185
74															
50	50														
60	45	45	49	99	110	121	280	261	294	297	300	313	334	357	348
43	80	100	100	280	283	527	409	451	465	467	460	456	445	430	385
	57	67	59	75	69	141	139	162	200	231	257	253	230	213	196
132	140	140	153	153	151	148	142	139	139	139	139	137	134	134	135
40+20 53+34	50+20 92+50	50 85+58	50 87+30	249 100+43	239 100+31	234 (定)22	229	225	228	228	233	230	458	464	350
68	53	52	66	85	85	73	138	185	184	196	189	184	173	158	162
243	278	363	400	389	367	347	342	317	290	270	270	270	240	140	130
50	300	300		290	270	270	548	525	548	270	268	275	275	275	273
200	120	300													
—					50	78	81	206	136	137	141	140	146	138	123
100	100	149	150	150	293	221	203	222	238	213	195	208	212	237	264
95	140	130	103	153	169	172		100	169	156	192	154	305	127	284
100	100	128	125	106	300	231	215	228	217	219	227	228	235	243	251
				85	135	152	161	117	110	194	168	174			
			40	42	47	48	45	42	56	83	67	142	154	141	131
—	296	90	165	392	319	302	301	207	252	335	159	176	336	301	321
—															
150	250	234	207	225	212	181	356	350	353	337	345	350	356	377	387
55	58	55	60	223	265	330	292	252	339	326	260	260	260	298	215
145	145	166	160	150	156	145	120	120	146	153	138	167	135	146	149
30	24	30	30	30	30	30	22	93	170	84	160	169	174	170	158
100	30	70	40	30	90	80	80	80		180	185	175	171	150	130
										200	193	190	208	210	202

公	高 田													
	広田水産					114	106	100	100	110	112	123	120	
	大船渡			(盛)	(盛)	(盛)	(盛)				240	225	74	
	大船渡農業			124	130	128	224	275	271	255				
	大船渡工業													
	住 田													
	計													
	釜石南		350		325	325	325	320	220	200	200	200	200	150
	釜石北													
	釜石工業													
	釜石商業				187	204	204	221	250	196	195	237	150	80
	大 植		80		70	126	150	80	60	40	40	39	20	21
	計													
	遠野	本校										92	88	
宮守														
遠野農業													86	
計														
山 田	本校			50	50	50	30	50	50	50	50	100	100	
	宮古川井	39		118	352	245	136	133	141	140	150			
	宮古北													
	宮古工業													
	宮古商業											143	174	
	宮古水産				114	120	128	103	100	105	105	120	120	
計														
岩泉	本校			35	29	36	38	38	48	48	50	81	100	
	田野畑													
計														
久慈	本校	220		223	210	215	210	140	140	145	145	20	20	
	山形													
	農林											161	166	
	水産													
	種市野													
計														
軽 米	伊保内			41	48	50	26	45	50	70	90	90	70	
	福岡	245		220	185	190	210	196	45	50	149	184	150	
	福岡工業													
	浄法寺									3				
	一 戸			150	150	160	210	225	220	217	236	250	250	
計														
市立	盛岡市立	302		234	239	112	97	150	150	150	150	150	150	
	久保学園	20		144	127	180	300	620	303	239	250	260	250	
私 立	生活学園													
	向中野													
	専大北上							15	30	50	40	40	40	
	一関修紅													
花巻商業														
岩手女子														
合 計	3,155	3,310	3,974	4,250	4,518	4,705	4,832	5,067	4,254	4,290	4,887	5,008	4,937	
加盟校数	22 (会員数不明)	22 (内3は会員数不明)	25	33	36	37	37	38	38	38	41	40	41	

註 1) 岩手県高等学校家庭クラブ連盟機関誌並びに全国家庭クラブ連盟名簿をもとにして作成
 2) 昭和27年度と29年度の加盟校名不明

	44	32	35	30	170	283	280	276	260	242	246	261	274	274	271			
170	180	189	150	152	153	146	142	184	232	273	277	277	280	276	275			
23	25	20	30															
64																		
	47	46	41	49	169	176	177	152	192	235	203	188	206	190	173			
200	200	160	179	175	160	160	150	150	352	322	287	292	314	324	330			
	100	100	* (唐丹29) 100	222	220	220	250	250	250	250	250	250	250	250	300			
30	20	25	30	187	203	183	179	187	193	185	30	228	202	96	198			
28	30	50	30	250	250	180	136	210	190	142	134	369	348	354	357			
						107	147	203	215	230	213	187	190	158	177			
						20	47	32	67	130	110	80	70	75	70			
30	30	50	30	100	100	88	90	97	209	209	189	209	250	377	407			
	30	30	50	150	177	185	168	188	207	158	168	172	505	338	330			
								166	60	60	50	45	150	244	180			
164	170	148	153	148	146	143	94	46	219	450	513	519	478	474	446			
120	130	138	150	150	150	145	170	229	316	273	274	276	281	278	274			
150	138	174	138	229	231	233	248	112	276	263	252	256	245	233	232			
75	55	108	162	146	140	125	136	159	331	318	313	336	357	281	208			
	27	295	360	369	403	260	178	139	132	136	135	135	184	184	223	231		
						148	140	140	130	180	220	260	260	250	260	255		
						42	15	40	85	185	266	317	339	330	259	266	255	247
	23	30	39	64	90	130	154	149	180	190	201	121	117	20	未			
82	145	152	150	132	154	150	150	150	220	227	213	208	218	239	230			
150	130	184	154	116	171	165	157	222	297	318	316	300	297	345	355			
280	246	265	258	261	244	241	283	290	300	455	464	460	464	460	475	135		
200	200	200	200	200	200	200	200	139	234	221	270	192	235	156	149			
220	180	180	150	180	170	150	130	130	150	140	105	85	75	170	180			
		260																
50	74	126	170	208			18	8										
40	20	20	10	10	10	8			50	50	50	102	122	138	134			
										70	72	64	30	30	31			
				11	11	5												
										30								
4,688	5,340	5,709	5,544	7,294	7,978	8,145	8,534	8,972	10,542	11,276	10,876	11,235	12,081	11,957	11,986			
42	47	45	47	47	48	49	48	48	47	51	50	50	49	49	50			

岩手県学校家庭クラブ連盟結成 昭和24年度において既に実験学校では、学校家庭クラブの実施要項ができていて、11月10日のH・P研究発表会（文部省指定校）の際に「H・P研究会当日の先生方の接待」というテーマで活動を開始している⁹⁾。そうして翌25年3月1日には総会を開いて、卒業学年から在校学年への事務引き継ぎを行ない、今年度の活動に対する反省をつぎのように記述している。

今年はクラブ活動も最初の事なので、又半年の期間でもあった為充分に力を発揮できず、思いうような成果が収められなかった。今までは主に校内を対象として力を注いできたが、本年度からは特に他校との連絡と交渉を大いに持って活動したい。

以上のような記録の中に県連盟結成へのきざしが伺われる。その後県内各高校においてもほぼつばつ学校家庭クラブが結成されて行き、遂に昭和27年11月15日県立盛岡短期大学講堂で、県下20校の学校家庭クラブを下部組織とする連合体組織として発足をみている。結成式当日のプログラムはつぎのとおりである。

- 1 開式の辞 久保高等学校⁷⁾
- 2 議長選出 佐藤文子（盛岡第一）
古館滋子（盛岡第二）
- 3 経過報告 県立盛岡第二高等学校
- 4 規約朗読 盛岡市立高等学校
- 5 宣言文朗読 県立高松高等学校⁸⁾
- 6 祝 辞
全国家庭科教育協会理事 佃 チカ
岩手県教育長 山中吾郎
農業クラブ会長 高橋清吾
県立盛岡第二高等学校長 鈴木清一
岩手県教育文化部長 鈴木広策
- 7 家庭クラブの歌合唱
- 8 総 会
議事、役員選出、会計審議、事業計画
- 9 H・Pの発表
- 10 講 評
- 11 閉式の辞

総会の中の事業計画の第一に機関誌発刊が上げられ可決されたことにより、創刊号が昭和28年3月に発行され、以後年1回の機関誌発行が継続事業として励行されている。

連盟発足当時は僅か20校の加盟で3,000名足らずの会員数であったが、昭和55年度には1—4表に見るとおり、50校約12,000名を数える組織に成長している。

II 被服領域

被服領域を中心とした34編について、①題目選定の理由、②研究方法、③研究内容について

総合的に鳥瞰し、考察を加えた。

（1） 題目選定の理由

理由で一番多く挙げられているのが「家族のため」の製作や「家族のため」の衣類整理で、全体の33編中13編もあり、その中でも「母のため」が圧倒的に多くを占めている。家庭科教育の中、被服領域は「家族のため」という価値に裏付けられた目的意識は明確にもち、科学的でしかも美しくという非合理性も含めた設計となっていて、商業的なファッションのデザインとは全く異った、発想から出発して一見地味な見映のしないようでありながら、表現に至る過程一思考のプロセスが非常に教育的重要性を持つことが理解される。

次に多いのが作業着9編、防寒着5編の順になっているが、全体の中で農業系高校の研究が34編中16編も占めている点は普通高校の数からみて、その割合がいかにか注目されてよい。岩手県が北国に位置を占める農業県であり、生活改善の余地が多々ある事を物語っている。

老人の被服研究は3編で、1編は祖母のため、1編はクラブ活動として老人ホーム慰問の折に贈る衣服の研究となっている。何れの研究も家族とか社会の生活福祉を志向する考え方が契機となって研究に踏み切っていることが大きな特徴となっている。

（2） 研究方法

研究を進めるに当たり、実態調査、もしくは基礎調査が殆ど全部の学校で試みられていて、実証主義的傾向が随所に窺われる。問題点の解明には自然科学的実験の方法を試みているのが大きな特徴である。高校で準備できる実験器具には限界があるし、知識、技術等の程度が専門家から見れば精密さとか、客観性、考察にやや稚拙さが見られるが、高校生の能力を十二分に出し切っており、これも又H・Pの研究のいつわらざる歴史とも言えるであろう。

H・Pは問題解決学習と言われるが、長い戦争の後の荒廃した貧しい生活から脱出したいという欲求は、乏しい物、を知恵と技術で補いつつ何かを創り出さずにはいられない衝動に駆られ、研究に拍車がかかっていった。

当時の研究調査を見ると実に精密で、しかも広範囲に行われていて、全国的な統計調査よりもはるかに実態を把握しており、地域における戦後の庶民の生活史が浮き彫りにされている。

乏しさと必要は人間の創造性をかき立てずにはおかない。現在（昭和56年）の眼から眺めると、当時の高校生は相当な技術とセンスの水準を持たせるべく指導されていたことは研究作品が実に立派であり、現今の既製品など及ぶべくもない。比較することさえ冒瀆することのように思える秀れて質の高い発想と技術が認められ、しかも息の長い2～3年の継続的研究も少なくなかない。中には、全国大会にも入賞をする等、レベルの高い研究が育っている。

研究する生徒の背後には指導者の並々ならぬ識見と息吹きを感じとることができる。指導者は時代の動向を敏感に察知し、直ちに教育系列の中に組みこんで生徒に反映させ、生徒の知識を総動員して目的に向かって編成し技術を道具として創作に取り組み結実させている。H・Pの成果は指導者と生徒が一体となってやる意欲なしには、成果は期待できないのである。

（3） 研究内容

研究内容⁹⁾を概観すると、全部で34編中、衣類整理6編を除く28編¹⁰⁾が製作を伴った研究と

なっている。(2-1表参照)

2-1表 研 究 内 容

年度	衣服整理	被 服 製 作		
		作 業 着	防 寒 着	老 人・幼児服外
27	家庭の衣服整理(大槌)			
28	食物のシミの種類と除去法(久慈)			
29		明るく暮せる働き良い服(福岡)		
30		楽しい作業衣(盛岡農) 農村婦人の働き着(福岡)		農村に於ける幼児の遊び着の合理化(水沢農)
31				制服を利用して(山田)
35		私たちの作業着(北上農)	防寒衣についての一考察(花巻農)	
36			防寒に適する毛糸編物の一考察(花巻農)	
37		耕耘機作業に適する作業ズボンの一考察(花巻農)		肥料袋・飼料袋を利用して(北上農)
38				乳幼児服の研究(福岡)
39	合理的な洗たく物の干し方(北上農)		農村におけるねんねこの一考察(花巻農)	園児服の研究(久保)
40			祖母の冬の衣服の一工夫(花巻農)	
41	衣生活の工夫(一戸)	溶接に適した作業着の研究(紫波)		
42	布製肥料袋の利用(福岡)	農薬中毒の母のために食と衣の工夫(紫波)		着られなくなった衣服利用について(岩泉)
43		働き着のくふう(久慈農水) 古い衣類の更生をしよう(住田)		老人服について(宮古商業) 枕の研究(花巻農) 夏の幼児の遊び着(盛岡市立) 冬の遊び着(岩谷堂)
45	すっきりと制服を着こなすために(一関二)	母の作業着の工夫(花巻農)		
47				地域に平高枕を(平館) 老人着の工夫(釜石北)
48				夏のアンダーウェア(大槌)
49			リフォームするよるこび(高田)	

戦後のカオスから立ちあがり、やっと新制高校が生まれ「学習指導要領一般編」試案の発表がなされたのは昭和23年である。戦争の余燼さめやらぬ頃の殆どの人々は、インフレに悩まされ、ぼろを身に纏い、飢えを凌ぐのがやっとの生活に喘いでいた。昭和25年には1,000円札発行、インフレは益々進行し極限に達したが、その年の6月25日、朝鮮戦争勃発を機に瀕死の産業界は次第に活力をとり戻し始め、市場によりやく物資が出廻り始めた。

岩手県高等学校家庭クラブ誌第1号はそのような世相を背景として誕生し、幾多の困難を乗り越えて現在に至っている。

衣類の更生 昭和27年度の「家族の衣類整理」という大槌高校の研究は以上のような社会状況下で当然要求される「更生・補綴」を含めた研究がトップを飾っている。衣類の更生はこれを筆頭に33編中18編と半数以上を占めている。15年間に至る苦しい戦争後の国内の衣料事情は必然的に生活改善の課題と技術が求められていた事を物語るものと言えよう。この研究は母に協力し、母親は娘の協力によって生み出された時間を別の仕事（パートタイム）で2,200円の収入を得、その収入を英語辞書400円、洋服生地・ランニングシャツ・パンツに800円、屋根の修理に15,00円当てている。当時のエンゲル係数は48.3%¹¹⁾（3-12表参照）、筆者は新採用の年で給料8,500円であったから、2,200円の収入は当時としては大きかった。更生、つまり廃物利用は全般的傾向であるが、農家でたまる肥料袋や飼料袋を利用したユニークな研究が昭和37年度北上農業高校、同42年度福岡高校によってなされている。その頃は使い捨て思想などなく「物を捨てるのは勿体ない」という観念が未だ存在して、昭和49年度、高田高校の「リフォームするよろこび」は寺で育った生徒が父母から物を大切にする教育を受けたことが研究の動機となっている。更生は、衣類の整理、漂白、染色、補綴も含めた手芸、デザイン等々科学・技術・センス・デザイン等被服の全領域を総合的に駆使して行われる。これらは古い物という制約のあることがかえってものを深く考えさせ、創造性や忍耐力を養い、物の命を大切にすることを体験を通して学ぶとともに製作過程の中から学習のよろこびを見出している。

作業着製作の傾向と国内事情 研究発表校は農業高校が多いため、農村生活の問題点が多く展開される。作業着は9編で、初めは和式だったものが時代の変遷とともに和洋折衷へ、さらに洋式へと変容する傾向がよく出ている。戦時中、国粹主義から排撃された洋風の生活形式はアメリカ進駐軍と共に国内を席巻し、洋裁教育が盛んになってきた風潮と軌を一にして国内の隅々まで浸透していった。昭和30年代は概して和洋折衷が多く35年度北上農業高校の研究は化繊¹²⁾を用い、ゆとりをもっている点を生かした和服形式と洋服の機能面からアプローチしている。生徒は知恵をしぼった考案であるが世界史的に捉えるとシルクロードに出没した遊牧民の胡服、即ち窄袖、カフタン形式¹³⁾とズボン形式¹⁴⁾の系譜である。作業に必要な運動量を加えた寛やかな、しかし体形型の服装形式は働く人びとの体形や生理に最も合致した基礎的・決定的な礎型で文明の発達とともに体形を離れた服飾が展開してもその基底にあり、古代からあらゆる時代あらゆる風土でも用いられてきたが特に寒帯系に多く見られる¹⁵⁾。価格は一回目付属品含め（50円）一反750円、2回目は1,350円を要した。昭和37年度「花巻農業高校の耕耘機作業に適する作業ズボンの一考察」は化繊で洋式ズボンの製作を試みていて和式もんぺから完全に転換している。同42年度紫波高校では「農業中毒」から身を守るべく食と衣の工夫をしている。遡って考えれば昭和31年熊本県水俣市に奇病発生の頃から農業散布も公害惹起の恐れが

あるかもしれぬと囁かれ始めていた。昭和35年池田内閣成立、国民所得倍增決定、昭和36年農業基本法公布、経団連・日経連が「技術教育振興確立推進に関する要望」を提出し、同年ソ連のガガーリン少佐の人工宇宙船地球一周に成功し、日本ではこれを契機に教育内容が科学工業重視の方向へ傾斜していったと言っても過言ではなく、日本の産業は農業から工業へ大きく転換し始めた。農業の近代化は核家族化へと変貌し、労働力の不足は農業の機械化による省力化と農業散布によって合理化して収穫をあげようとするものであるが一方では副産物として環境汚染と公害を生み出す要因を誘発してゆくのである。上記の研究は国家政策を反映した農村の問題を敏感に受けとめた課題解決の研究である。即ち花巻農業高校の研究は農機具導入に備えた作業着の研究であり、紫波高校の農業中毒への対策はわが母のみならず農村全体の健康という普遍性をもつ課題でもあり問題点を機敏に把握して科学・技術を巧みに解決方法に活用して生活を守るべく努力し結実させている。衣服の目的は衛生と身体の保護が主要な機能であるゆえ、指導者は鋭く現実の環境問題を分析し、生活への対応を検討、示唆を与えている。昭和41年度紫波高校の「溶接に適した作業着の研究」はまさに「衣服は身体を守る鎧である」の感を深くするものである。農機具の部分品の電気溶接に携わっている父・兄達の仕事はいつも火傷と隣りあわせの危険にさらされ、作業着は重要な生活の必需品である。特殊な条件を必要とする作業着の材料の性能と形式について試行錯誤をくりかえしながら科学的な研究をつみ重ね、試着してみても反省・工夫をくりかえしつつ形式を考え出している。腕の関節の屈伸による皺や襲の中によく火玉が飛びこみ焼け穴をつくるのみならずやけどの危険があるのでどんな材料で、どんな形に作ったらよいかを暗中模索した。皮膚の保護には厚地がよいが重かったり腕の屈伸の不自由では思うように仕事はかどらない。地厚な材料を身につけ屈伸をしやすくするには小さく切断してすき間なく重ねて綴ることがよいのではないかと、この生徒はこの打開策を鎧こざねの小札おどし¹⁷⁾を緘おどし¹⁸⁾(紐)で綴っている点からヒントを得ている。甲冑¹⁹⁾の形式は攻撃を防禦するため戦術や武器の進歩と共に変化してゆくが小札を糸や皮紐で綴り合わせて作りあげる点は変らない。この知恵を大鎧¹⁹⁾の小札の緘おどしから学びとったということは大変秀れたものといえよう。腕のカバーは合成ゴムを細く切って上だけ1~2cm位ポンドで貼りつけ、下は貼らずに上だけ重ねて貼るので火玉がたまることなく落ちてしまうので損傷の心配がなくなってしまった。又前だれ(前かけ)の下方の中央に切り込みを入れたのも大鎧の前草摺に似た形式にして作業時の脚部の開閉(運動)の調節に役かっている。この作品は全国F・H・J大会でも入賞した極めてユニークで創意あふれる作品である。43年度久慈農林水産高校「働き着の工夫」はアンケート中「長い間の習慣で少しぐらいの不自由があっても気づかなくなっている」という老人の言葉に着目して柔軟な発想をしている。A家事向にはエプロン²⁰⁾、B水田・園芸用にはツーピース式²¹⁾、C酪農及び養豚にワンピース式²²⁾の三種類を製作している。布地は全部化繊である。昭和45年度花巻農業高校の「母の作業着の工夫」はH・Pで生徒は陸上競技部選手で夜と休日の時間でしか研究できないという制約の下で進め、夏向、冬向美的で経済的観点から上衣、下衣、エプロン帽子等にそれぞれ独得で細心の工夫をこらしている。型紙利用して時間の節約をしているのは学校で型紙指導してきた効果の現れであろう。紙幅の都合で充分意を尽せず残念である。

防寒着、老人服 この二つは関係づけて研究しているものもあり、更生も含めて7編、老人服3編、ねんねこの改良1編を含んでいる。夏向の住居の多い本県で当時の暖房は囲炉裏や炬

達が殆ど石油やガスストーブが一般化しない頃の冬の防寒着は重要な必需品である。寒さに弱い老人や、子供を背負って働かざるを得ない婦人にとって又子供の保温上ねんねこは欠くことのできないものである。そこに着目したこの研究は老人や子供は家庭で世話するのが当然であった当時の家庭の機能や生活習慣を反映している。老人ホームや保育所設置等の社会福祉思想の一般化されていない当時は家族員は互に気を配っていた。家族員各々の生活に密着した衣服の考案はヒューマニズムに裏打ちされ心暖まるものがある。昭和35年度花巻農業高校「防寒衣についての一考察」²²²は、吹雪の日、角巻²²³を被って手拭いを頬被りして線路を歩いたため汽車²²⁴にひかれる事故がこの研究の動機になっている。角巻は風を通さず大変保温性に富むが、頭からすっぽりと被って前で重ね合わせ両手で押えなくてははずり落ちてしまうから手を使わず非活動的である。ルーツは定かではないが巻き衣の一種と考えられるが、イランのチャルシャフ²²⁵とそっくりなのは驚かされる。縁飾りの房をマクラメ風に編んで垂らしている様式はアッシリア王アッシュル・ナシル・アブリ二世²²⁶（B・C884～859）の浮彫像などに見られるのが現時点で一番古く、他には房飾りは見当らない。さてこの防寒着を活動的にするためには纏う形式から躯幹部それぞれを包む洋風の形式が検討され、折衷形式が生み出される。また化繊を採りあげあらゆる角度から性能実験をし、老人向としては樹脂加工布、綿入キルティング、中入綿に日本紙²²⁷を用いている。外出着、肌着、下衣、家庭着等すべてに亘って研究を試みている。

昭和36年度花巻農業高校「防寒着に適する毛糸編物の一考察」で保温性の角度の実験をし、編方、着方に至る一貫性をもつものに纏めている。昭和39年度同校は和式ねんねこからママコートに流行しはじめている点に着目しつつ両方の長所を折衷した製作をしている。簡単にできる保温性の実験に基づいて化繊綿を選び、デザインは初めのA式の袖付の欠点を「もじり袖」（袖下をバイヤスにする）を採り入れて改善している。生活が次第に洋風化しテンポが早くなってきている。昭和40年度同校の「祖母の冬の衣服の一工夫」は前年のもじり袖の長所を採用²²⁸し、腰の曲りを考慮した裁断で和風の中着、上着を考案し、防寒の目的から重ね着で重くなりがちな習慣をなくするため下着や生地のかふうをし、更に「住居のすまい方」まで生活を総合的に捉え視線を環境まで延長した着眼は一步前進の感がある。昭和43年度宮古商業高校「老人服について」の視点は今までとガラリと趣きを異にし、アンケートも夏物冬物の和洋服の中で多く愛しているものは？」が先に「不便さ」はその次になっている。研究目的は「着やすく好んで着用できること、衣服を着る楽しさをよりいっそう多く味わってもらう」点が主眼になっていて、とかく経済的、機能的な合理性の追求が多かったH・Pも高度経済成長期の頃になるに従い、心のゆとりの反映と見られる非合理性に眼が向けられてきている。市販されていない老人服全般について工夫研究されている。昭和47年度釜石北校「老人着の工夫」は老人ホーム慰問で贈る衣服の研究である。国民全般は経済的に安定し社会的ボランティア活動に着目しはじめている。防寒着の条件となる材料、被服構成、形態等について研究し、その基盤に立ってフード付衿カバー²²⁹、四重層袖なし羽織²³⁰（含気量大な物と密な織目の四素材交互に使用）改良袖なし羽織、肩掛布団二種等独創的且つバラエティーに富んだ衣類の研究をしている。（昭和49年度高田高校の研究は前述している）

乳幼児服・枕など 乳幼児服は3編あり、既製品についての批判がこの研究を裏切るものにしてしている。昭和35年度盛高校の研究は幼児の躰に重点を置き、子供の衣服に母が手づから手

芸をほどこす姿はそのまま教育である。幼児の教育は日常の衣・食・住を通してこそ実りのあるものである。被服製作を単に「家事労働」と呼ぶのは果して妥当か否かの示唆をするものである。他の2編は何れも幼児の生活に視点をあてて、幼児も人格を尊重すべきだという思想を浸透させた研究の纏め方をしている。枕の製作は昭和43年度花巻農業高校、同47年度平館高校の2編あり、安眠できる枕の条件を詰め物各種の実験を試みつつ製作している。二校の研究の違いは詰め物にある。花巻ではソバガラ、モミガラ、くずスポンジを用いているが、平館高では中袋に詰め物として「脱脂綿とソバガラ」を用いて進展を見せ、地域に普及活動の輪を拡げている。毎日使用する枕でありながらあまり神経を用いない枕について健康な生活の観点から研究をすすめ、家庭クラブ研究活動の面目躍如たるものがある。

Ⅲ 食物領域

食物領域71編の内容を①病態栄養、②偏食の矯正、③食生活改善、④食物と経済、⑤おやつ・小昼・夜食、⑥貯蔵食、保存食利用、⑦楽しい食事、⑧弁当、⑨普及活動、⑩加工食品、⑪特殊栄養、⑫郷土食の12項目に分類し、食生活をとりまく時代的背景を考察しながら、研究の推移をみた。

(1) 病態栄養

研究の推移 日本人の主要死因別死亡率の年次推移は、戦前までは結核、肺炎、気管支炎など感染による死亡が上位を占めていたが、昭和35年頃より脳血管疾患、がん、心臓病が三大成人病といわれ³²⁾、死因が大きく変化した。この傾向はH・P並びにS・Pの研究においてもみることができる。即ち、研究対象となった病気は3-1表の如くであり、時代の推移は病気の推移となり、研究の対象となっている。

3-1表 病態栄養の研究テーマおよび対象

年度	学 校 名	類 別	研 究 テ ー マ	病名並びに対象者
27	花 泉	H・P	病気がちな我が家を健康な家庭へ	結核(父) 腹膜炎(妹) 肺浸潤(本人)
31	一 戸	H・P	浪打村の疾病状態とその原因	胸部疾患・乳幼児疾病・迷信(村全体)
36	黒 工	H・P	母の健康を目指して	腎臓病と高血圧(母)
42	花 卷 農	S・P	高血圧と食事	脳卒中(地域)
44	紫 波	H・P	高血圧の母の健康を願って	高血圧(母)
45	盛 岡 市 立	H・P	コンフリーを追求して	高血圧(祖母)
48	高 田	H・P	糖尿病の祖父のために	糖尿病(祖父)
49	盛 岡 二	H・P	母の健康管理のための食餌改良	低血圧(母)
50	高 田	S・P	貧血をなくそう私たちの手で	貧血(学校全体)
53	軽 米	H・P	我が家の食事改善	糖尿病(母)
54	盛 岡 市 立	H・P	私たちの食生活と貧血	貧血(学校全体)
	一 戸	S・P	お母さんも偏食ではありませんか?	貧血(地域全体)

考察 ①昭和27年度花泉高H・P研究は、自分の住む村（花泉周辺か一筆者）は人口4,000人中40人が結核患者と報告され、生徒自身もそれに該当し、戦後猛威をふるった結核の恐ろしさを指摘している。この研究は結核発病の原因を追求し、衣、食、住、経済、社会問題を検討する中で特に食事面での栄養の充足を考慮し、動物蛋白源として養鶏を実行したことが改善の足がかりとなったものである。②昭和31年度一戸高H・P研究は、地域の食習慣の中で肉食禁忌が迷信に原因していることを指摘し、地域の小学生（6年）の60%はこの迷信を知っていることを報告し、その原因が迷信を支配している世襲的家族制度にあるとして、ろう習の打破を訴えたものである。③昭和42年度花巻農業高S・P研究班は、花巻、江刺地域における脳卒中死亡率が県下一高いことを指摘し、岩手大学の指導による「麦混食」「精米方法の改善」「減塩食」等

3-2表 貧血検査結果

1 血色素量検査成績（高等学校）

順位	学 校 名	昭 50			順位	学 校 名	昭 53		
		全体%	男 %	女 %			全体%	男 %	女 %
1	江 刺	16.3	17.4	15.2	1	種 市	13.2	10.6	14.8
2	千 厩	12.4	10.1	14.4	2	岩泉田野畑分校	11.9	—	11.6
3	釜 石 工 業	9.1	9.2	—	3	盛 岡 第 二	11.3	—	11.3
4	住 田	8.8	6.1	10.3	4	岩 泉	11.0	19.0	6.0
5	釜 石 商 業	8.7	9.8	8.6	5	岩泉小川分校	10.7	12.8	8.8
6	宮 古 商 業	8.0	10.5	7.1	6	住 田	10.6	9.0	11.9
7	岩 谷 堂 農 林	7.9	5.4	11.3	7	山 田	10.5	12.8	9.1
8	金 ケ 崎	7.5	6.1	9.6	8	紫 波	9.4	10.2	8.7
9	千 厩 農 業	7.4	6.8	8.0	9	大 槌	9.1	10.1	8.4
10	岩 谷 堂	7.3	4.6	9.1	10	宮 古 工 業	8.9	8.7	—
11	黒 沢 尻 南	7.2		7.2	11	軽 米	8.5	7.0	9.9
12	沼 宮 内	7.0	3.7	9.7	12	前 沢	7.8	5.4	9.2
13	藤 沢	6.7	2.3	9.8	13	葛 巻	7.6	7.7	7.4
14	軽 米	6.6	8.0	5.5	14	釜 石 商 業	6.8	4.4	7.1
15	盛 岡 市 立	6.3	3.3	6.9	15	藤 沢	6.7	7.4	6.1
	盛 岡 第 二	6.3		6.3	16	江 刺	6.3	4.1	7.9
	水 沢 農 業	6.3	3.3	9.5		水 沢 商 業	6.3	6.0	6.4
18	紫 波	5.5	3.3	7.7		大 東	6.3	7.2	6.5
	大 槌	5.5	5.2	5.6		釜 石 南	6.3	4.6	8.1
20	水 沢 商 業	5.3	3.6	6.1		宮 古 水 産	6.3	7.4	4.9
					21	北 上 農 業	6.1	5.6	6.4
						釜 石 北	6.1	5.9	6.2
					23	東 和	5.9	6.1	5.7
						宮 古	5.9	8.3	3.3
					25	雫 石	5.4	4.2	6.8
						広 田 水 産	5.4	6.8	4.5
					27	岩 谷 堂 農 林	5.3	4.5	6.7
					28	釜 石 工	5.1	5.3	0
合 計		6.2	5.2	6.8	合 計		6.7	6.4	7.1

註 岩手県予防医学協会事業年報，第5号（昭和50年度），第8号（昭和53年度）をもとに作成

3-3表 貧血検査結果

II 血色素量・血球容積検査成績(高等学校)

順位	学 校 名	昭 50			順位	学 校 名	昭 53		
		全体%	男 %	女 %			全体%	男 %	女 %
1	岩泉田野畑分校	35.5	40.0	34.6	1	遠 野	16.3	19.4	14.7
2	広 田 水 産	19.4	23.0	18.2	2	花 巻 南(全)	14.1	—	14.1
3	花 巻 北 商 業	19.0	20.5	16.7	3	沼 宮 内	13.5	14.0	13.3
4	一 関 第 二	17.1	16.7	17.3	4	花 巻 南(定)	12.9	—	16.7
5	盛 岡 工 業	15.6	15.9	—	5	花 巻 北	12.7	13.0	12.2
6	花 巻 南(定)	15.5	—	16.0	6	花 巻 北 商 業	12.2	10.8	14.6
7	岩 泉	14.7	13.6	15.1	7	盛 岡 商 業	11.1	11.7	10.0
8	花 巻 北	13.2	15.7	8.4	8	盛 岡 市 立	10.6	14.9	9.6
9	花 巻 南(全)	12.1	—	12.1	9	一 関 第 一	9.9	7.8	13.5
10	高 田(全)	11.6	13.5	10.6	10	一 関 第 二	9.8	10.1	9.6
11	大 迫	9.7	10.1	9.3	11	一 関 農 業	9.5	6.2	12.5
12	高 田(定)	6.5	0	12.1	12	盛 岡 第 三	8.6	5.4	12.3
13	久 慈 水 産	6.3	6.1	6.4		伊 保 内	8.6	7.7	9.3
14	一 関 第 一	5.6	2.0	10.4	14	高 田	8.3	10.4	7.1
15	盛 岡 北	5.3	4.5	6.5	15	千 厩 農 業	8.0	11.7	5.2
					16	盛 岡 北	7.0	6.6	7.7
					17	大 迫	6.5	6.1	6.8
					18	水 沢 農 業	6.2	5.3	7.2
合 計		12.3	12.5	11.9	合 計		10.1	9.7	10.4

註 岩手県予防医学協会事業年報, 第5号, 第8号をもとに作成

の諸問題を研究, 白米と漬物中心の食生活改善に意欲的に取組んだ。又昭和44年度紫波高, 昭和45年度盛岡市立高H・P研究は高血圧に悩む家族の食事指導を研究したが, 特にコンフリーの常食が血圧降下に効果的であることを実証したユニークなものである。④昭和48年度高田高, 昭和53年度軽米高校H・Pは祖父や母の糖尿病の食生活改善に取り組んだが, 食糧事情が経済成長と共に好転し, その結果として砂糖の消費量も昭和45年頃より急速に増加し(一日平均50g³³⁾を越す)たことと相まって, う歯や糖尿病の問題が研究課題になってきたことは皮肉である。⑤昭和50年度高田高, 昭和54年度盛岡市立, 同一戸高S・P研究班は全校的に問題視されてきた貧血の研究に取り組んだ。昭和47—48年の国民栄養調査結果によると, 貧血者は女性に20—30%, 男性10%余もみられ, これらはほとんどが栄養性貧血³⁴⁾, その大部分が鉄分の不足と推測され, 岩手県高校生の実態は3—2表, 3—3表にみられるように問題が多い。このことを学校家庭クラブで大きく取りあげたことは今日的課題として貧血問題の重大性を知ることができる。最近の食事傾向がインスタント化し, 朝食抜きの児童・生徒がふえるなど, アンバランスな食事が問題の所在にあることをこれらの研究は指摘している。貧血に効果のある緑黄色野菜やレバー食のくふうを行ったことはどの学校の研究にも共通してみられるが, 学校だけでなく地域の普及活動にも努力したことは注目し値する。特に一戸高の研究は高く評価され, 文部大臣賞の榮譽に輝いた。

（2）偏食の矯正

①昭和27年度花巻農業高H・P研究は、幼児の偏食矯正が知力にも関係ありとして取組んだが、当時の献立内容は幼児食を特別に考慮してはならず、偏食といってもにんじんやねぎ等を食べない程度のもので、食糧不足時代の偏食問題の所在と、今日の既製品化、糖分過剰等の問題とはおよそかけ離れた感がある。②昭和43年度紫波高H・P研究は、自己の偏食問題を研究し、その原因を追求、反省し、年間自家栽培野菜計画を立てて、食卓に緑黄色野菜を絶やさない栽培方針を打立てることと、ドライ葉菜作成の研究を試みたもので、この研究は東北地区代表として全国大会に発表され又、県下各高校家庭クラブ活動にとりあげられた研究でもある。③昭和44年度花巻農業高H・P研究は、家事手伝をしながら住込み下宿先児童の偏食矯正に取組んだもので、家族や自分の問題をも十分に果し得ないむずかしさのある中で、他人の子の世話をかって出たその勇気が評価される研究である。（3-4表）

3-4表 偏食の矯正の研究

年 度	学 校 名	類 別	研 究 テ ー マ
27	花 巻 農	H・P	妹の偏食矯正と知力の養成
43	紫 波	H・P	偏食を直して健康な身体に
44	花 巻 農	H・P	下宿先の子供の偏食の矯正

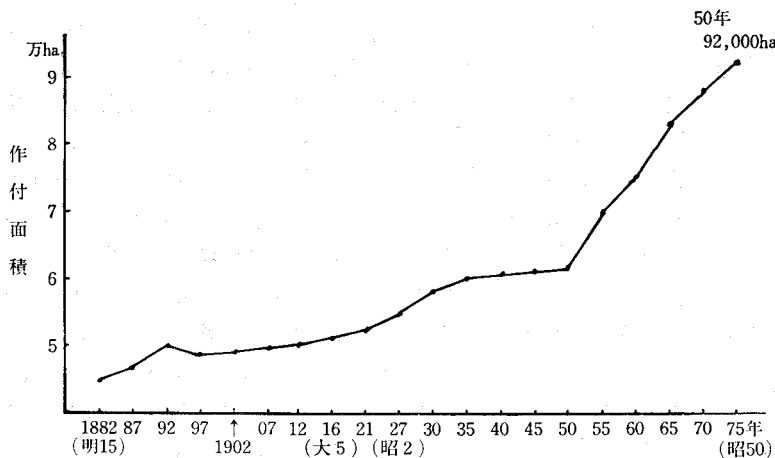
（3）食生活（栄養・献立）改善

研究の推移 この研究は17題あり（3-5表）他の項目でも最終的には食生活改善に結びつく研究がほとんどである。研究内容からみて時代の変遷がよく出ている。これを分析すると①日常食における主食の変化である。昭和28年度水沢農業高、29年度宮古高のH・P研究にみえる米と麦の混食率が4:1、昭和33年度福岡高H・P研究には強化米が登場し0.7%の混入率、昭和38年度軽米高S・Pの研究では全村が（戸数18戸。人口119人、農業100%、副業炭焼4戸、出稼ぎ3戸、和裁2戸、日雇1戸）ひえ混食（混食率記入なし）と記録されている。それ以後の研究には全く雑穀の混食はなくなり、全部が白米飯となっている。

国及び県の米作面積増加に伴う収量の著しい変化が日常食を地域性なく「白米」一色に換えたといえよう。（3-1図、3-2図）②栄養素の不足から過剰へ。昭和28~44年度頃までの研究をみると、特に昭和35年頃の高度経済成長がうたわれる以前は動物性蛋白質、脂肪摂取量の不足が目立ち、飯・汁・漬物といった穀類偏重に、魚・肉・卵・乳・油脂の摂取増加を訴えた研究が多く、次第にバランスの問題が指摘され、カルシウムや鉄分、ビタミンAの給源である緑黄色野菜やレバー食の研究が多くみられるようになっている。又いも類、豆類の不足が問題視され（昭和46~54年頃の研究）都市部では果物、淡色野菜の過剰摂取（昭和51年度の研究）等が問われ出し、栄養素や食品の摂取状況と献立・調理に時代の推移が感じられる。一例をあげれば昭和28年度水沢農業高H・P研究の中でカレーライスに鰹なまりの生利を用い、当時獣肉類摂取がほとんどゼロに等しい経済状況下において、いかにして魅力ある献立・調理ができるかを試みたものと思われる。③和食中心型の献立。年度を問わず地域別、対象別を問わず「御飯と味噌汁」を中心とする典型的な和食型であり、これは岩手県の食事慣習を知る上で大きな特徴と言えそうである。④地域の食生活問題をテーマとしてとりあげたことで、昭和38年度軽米高

3-5表 食生活改善に関する研究

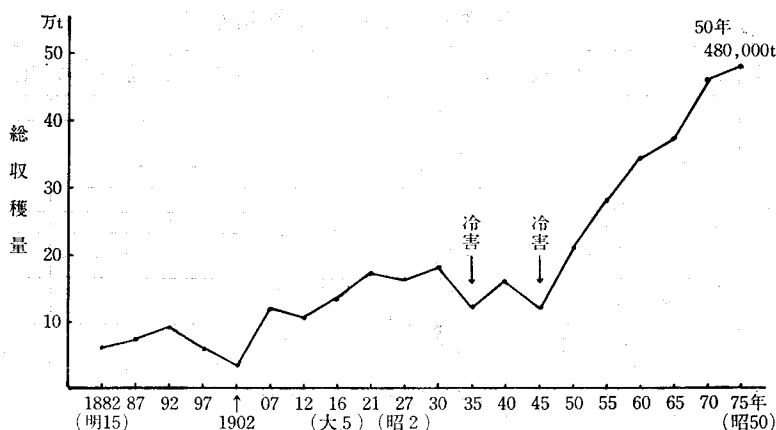
年 度	学 校 名	区 分	研 究 テ ー マ
28	盛岡農 水沢農	H・P H・P	我が家の献立 改善我が家の食生活
29	花宮泉 宮古	S・P H・P	食生活の改善の方向を私達の足元から 我が家の夏期献立の検討
31	宮古	S・P	さんまと私達の生活
33	福岡	H・P	我が家の献立と食物費の検討
35	水沢農	H・P	献立改善と食費
38	軽釜米 釜石南	S・P S・P	農村生活向上のために 釜石の食生活とカード式献立の工夫
39	北上農	H・P	本校における農場管理宿舍の献立を試みて
41	宮古商	S・P	食生活の改善
43	花巻農	H・P	合理的な食生活のために
44	釜石北	H・P	栄養カルタで食生活の向上を
46	平館	S・P	地域の食生活改善
49	釜石南	H・P	我が家の食事のバランスをとるために
51	盛岡二	H・P	我が家の食生活改善
54	久慈水	S・P	うす味の食生活をめざして



3-1図 作付面積の移り変わり (水稲)

「いわての農業」岩手県編集

が魚肉禁忌の迷信打破について。昭和31年度地域の生産物を取りあげたものとしては宮古高の「サンマ」、昭和46年度平館高の「かぼちゃ」等がある。これらは主題を通して地域に密着し



3-2図 米生産量の移り変わり (水稲)
「いわての農業」岩手県編集

た課題意識をもたせ、食生活改善運動へと発展させていった例である。

考察 ①昭和28年度水沢農業高H・Pでは主食偏重の食事傾向を問題として研究しているが3-6表、3-7表は国民栄養調査の年次推移と比較して当時の食生活の実態を知ることができる。②昭和29年度花泉高S・P食物班は、各家庭のし好に応じ変化ある献立・調理を通して食生活改善に取り組んだがその中で特に調味料の使用頻度調査を試みた。これによると極端に少ないのがソースやバターで高価な為に用いられない点もあるが、それよりも農村の人達の味覚が複雑な味より単純な調味を好む³⁵⁾という表現で記されており、味覚の変化や調味料の多様化について、現在の使用頻度等と比較研究してみたい内容である。③昭和29年度宮古高H・Pの夏バテ防止の献立改善の研究では脂肪、蛋白質、糖質別エネルギー比が30:15:55³⁶⁾の理想

3-6表 昭和28年7月食品摂取量

類別	標準量 g	一人一日摂取平均量		摂取量 g	標準量に対する摂取量の割合	
		自家生産	購入		100	
穀類	450	米, 麦		600		130%
魚類	140	卵	かつおふし, いわし, ぶり, にしん	75		53%
野菜類	350	大根, キャベツ, 玉葱, さつげ		300		85%
海藻類	3		こんぶ, 若布, のり	1		30%
調味料	100	みそ, 油, 醤油	砂糖, 塩	60		60%
漬物類	50	たくあん, 梅干し, きょうり, らっきょう		30		60%
その他	100	くるみ		30		30%
費用		47円	9円			

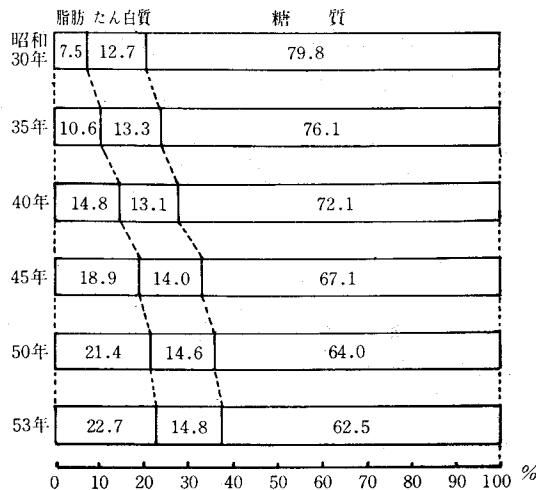
註 昭28, 第2号, 岩手県高等学校クラブ誌 P.22, 水沢農「我が家の食生活」

3-7表 昭和28年7月栄養素摂取量

栄養素	標準量	摂取量	標準に対する摂取量の割合
蛋白質	80g	82g	102%
脂肪	25g	19.25g	77%
炭水化物	65%	75%	101%
熱量	2400cal	2630cal	109%
ビタミンA	500iu	454iu	10%
ク B ₁	1.0mg	1.05mg	105%
ク B ₂	1.0mg	1.08mg	108%
無機質	2.7mg	2.2mg	81%

註 昭28, 第2号, 岩手県高等学校クラブ誌 P.22, 水沢農「我が家の食生活」

比に対し, 9:14:77³⁷⁾と傾りがあることを指摘して改善に取り組んでいる。しかし昭和30年国民栄養調査では3-3図にみられるように7.5:12.7:79.8と悪く, むしろH・P研究者のほうが幾分よい傾向を示しており, 当時の国民栄養の実態を想起することができる。しかし理想値に近い蛋白質の内容は豆製品が中心で植物蛋白に偏り, 獣肉類は1ヶ月に2-3回³⁸⁾程度の摂取状況である。又当時パン食に牛乳飲料のないことも注目に値する³⁹⁾。当時牛乳消費量の微少なことは国民栄養調査結果でもわかるとおり, 昭和30年14.2gである。それが昭和53年には約8倍に伸びて国民1人平均116.7gの摂取量となっており, 今日生産量の過剰を取沙汰する問題等は諸外国の供給高3-8表と比較して, まだ消費拡大の余地があり, 調理のくふうが必要と考えられる。④昭和31年度宮古高S・P食物班はさんま漁獲高日本有数を誇る漁港としての地域性を生かし, 一般的な食べかたにあきた住民の調査から, 現代的なし好をとり入れ, 形を変えて, ソーセージ, かまぼこ, そぼろ等の加工練製品の研究に取り組んだもので調理法



3-3図 脂肪, たん白質, 糖質別エネルギー比 (年次推移)
厚生省 国民栄養調査

や献立の組み合わせ等を地域住民に教示、普及した特色ある研究で、どちらかと言えば農業形態にかかわる研究の多い中で異色といえる。⑤昭和38年度軽米高S・P活動では、地域の生活全般について総合的に研究し、特に食生活の内容では、ア)食物摂取状況調査を通して3-9-A表、3-9-B表のような問題点を見出し、イ)迷信及び経済問題からくる食生活の偏り、特に獣鳥魚肉類の禁忌の問題をとりあげ、ウ)台所の衛生、能率の問題を研究し台所改善へと発展させている。この時代は高度経済成長が次第に岩手の農村にも波及し、生活改善の気運が盛り上がりつつあったが、当地域における高校生の活動が地域の婦人会活動を大いに刺激したものと思われる。⑥昭和46年度平館高S・P食物班はこの研究の動機が地域住民の食生活に関する意識が全般的に低く食事に関係する病気が多いことを指摘している。調査者87世帯中感冒34%、動脈硬化症16%、胃炎19%、高血圧23%、神経痛、口角炎（比率記入なし）の疾病

3-8表 各国別1人1日当り食糧供給高

国名	年次	牛乳(g) 乳製品
ノルウェー	1975	1,353
スイス	1975	1,038
イギリス	1975	993
スウェーデン	1975	985
フランス	1975	876
カナダ	1975	826
ドイツ連邦共和国	1975	738
アメリカ合衆国	1975	674
オーストリア	1975	649
イタリヤ	1975	520
ソ連	1964~66	476
アルゼンチン	1972~74	225
南アフリカ共和国	1964~66	222
日本	1978	163
ブラジル	1972~74	136
エジプト	1968~69	135
インド	1972~74	93
フィリッピン	1969	54
中華人民共和国	1972~74	9

註 香川綾編「三訂補食品成分表」1981年度版P.153をもとに構成

3-9-A表 軽米地区の食物摂取状況（昭和38年）

ごはんのみそ汁の一日平均摂取量

（1週間分の平均）

摘要	ごはん		みそ汁	
	改善前	改善後	改善前	改善後
朝	2.1 杯	2 杯	2.8 杯	2 杯
昼	2.7	2	1.5	1.7
夕	2.4	2	2.6	1.5

註 「農村生活向上のために」軽米高校食物班の地域調査協力家庭の献立をもとにして筆者が再構成したもの

を有し、憂慮すべき状況下にあること、又自家製農産物の調理工夫の不足なことを課題としてとりあげた、その結果、住民の97.3%も栽培している「かぼちゃ」に着目し、生徒達がまず調理技術と献立、調理能力を開発すべく校内かぼちゃコンクール等を開き、地域の普及活動へと発展させていった。このような研究方法は専門学科である家政科としての学習成果とみるべきであろう。⑦昭和54年度久慈水産高S・P班は薄味の食生活をめざして地域住民の味覚を変えようとして積極的に取組んだが問題の多い食事が成人病を急増させ、特に岩手県の脳卒中死亡率を増加させ⁴⁰⁾、県北、久慈地域の問題も大きい。このことを重くみて塩分制限問題をS・Pとしてとりあげ、地域への啓蒙を呼びかけたものである。

3-9-B表 おかずの一週間摂取回数と内容(朝・昼・夕)

(昭38 軽米地区)

摘 要	主 菜		副 菜		つ け も の	
	改 善 前	改 善 後	改 善 前	改 善 後	改 善 前	改 善 後
回 数	5	11	3	3	13	9
内 容	魚 1 卵 焼 2 煮 つけ 1 天 ぷら 1	魚 1 卵 焼 2 煮 つけ 2 やさい油 炒め 2 鉄火みそ 2 つくだに 1 カレーライス 1	大根おろし 2 青菜浸し 1	大根おろし 1 青菜浸し 1 生やさい 1	たくわん 7 キャベツと大根 4 梅 干 2	たくわん 7 キャベツと大根 1 梅 干 1

註 「農村生活向上のために」軽米高校食物班の地域調査協力家庭の献立をもとにして筆者が再構成したもの

(4) 食物と経済

研究の推移 この項目は8編の研究で、昭和29年度から昭和44年度の範囲に出現し(3-10表)、それ以後は登場していない。3-11表にみられる生活費に占める食料費の割合は昭和26年51.7%で次第に経済が好転し、昭和42年34.5%となっている。しかし、昭和35年岩手県平均のエンゲル係数が54%、僻地の upper 層部79.2%、下層部92.3%と極限に近い貧しい生活実態が報告され⁴³⁾、食べていくのに精いっぱい世相をこの記録から知ることができる。経済が好転し、家計に占める食物費の問題は除々に中心的な研究対象からはずれて行った。

考察 ①昭和29年度福岡高H・P研究は我が家の1ヶ月食料費予算を全収入の56.8%とし、計画的に消費した結果、実支出を48.6%におさえることができたことと自己評価している。この研究者家庭の収入総額と食料費支出の割合は勤労者家庭平均(3-11表)と大体一致しているが、8人家族で1人1日食費51円という実態である(3-12-B表)。この実態は栄養水準を

3-10表 食物と経済に関する研究

年 度	学 校	類 別	研 究 テ ー マ
29	福 岡	H・P	我が家の食物と経済
31	水 沢 農	H・P	我が家の経済的な食生活の工夫
33	福 岡	H・P	我が家の献立と食物費の検討
35	水 沢 農	H・P	改善献立と食物費
38	大 槌	S・P	食品購入の一考察
40	紫 波	H・P	食物費の現金支出減をめざして
40	福 岡	H・P	我が家の家計簿の歴史
44	前 沢	H・P	物価を背景とした自炊生活の一考察

3-11表 勤労者家庭平均1か月の生活費（食物費のみ抜粋）

年次	生活費			
	A 生活費総額 円	B 食料費 円	A/B (%)	
金額 (円)	昭 26 年	14,620	7,554	51.7
	27	18,161	8,767	48.3
	28	21,727	9,774	45.0
	29	23,067	10,501	45.5
	30	23,513	10,465	44.5
	31	24,231	10,399	42.9
	32	26,092	10,937	41.9
	33	27,799	11,444	41.1
	34	29,375	11,686	39.8
	35	32,093	12,440	38.8
	36	34,896	13,170	37.7
	37	39,339	14,454	36.7
	38	43,927	15,988	36.4
	39	48,324	17,265	35.7
	40	51,859	18,801	36.3
41	56,515	19,837	35.1	
42	61,918	21,380	34.5	

註 「家庭経済学」伊藤秋子，お茶の水女子大学家政学講座14，P.119

3-12-A表 生活費に占める食料費（昭29，1ヶ月）

生活費 A	食料費 B	食料費内訳	A/B %
25,000円 <8人家族>	12,145円	主食 5,800 (49) 副食 2,800 (21) 嗜好品 2,815 (21) 調味料 730 (9)	48.6

註 「我が家の食物と経済」福岡高校 P.37 をもとに構成

満たすうえでどの程度のレベルにあったろうか。これを知る方法として、当時の配給米 1 kg 80円（3-13表）を51円で購入できる量 638gと換算し、昭和56年現在の標準米購入金額に換算すると 223円となる。この金額は栄養水準⁴²⁾を満す標準価格の約三分の一であり、これからみて昭和29年の食費51円はかなり低い栄養水準であったことが想像される。事実副食物の購入状況は3-14表にみられるように魚2.5日に1回、野菜その他3.7日に1回、獣鳥肉類ゼロとなっている。全生活費の約50%以上を占める食料費の支出内容はこのように貧しく厳しいのが昭和29年頃の実態である。しかもこの生活状況は全勤労者の生活構造であったので、現在の豊かさと比較して時代の推移を知る貴重な資料といえよう。②昭和32年度軽米高H・P研究は食費を栄養水準のもとに計画し112円を計上した。この内容は主食に35円、蛋白質源食品30円、野菜類15円、油脂類7円、調味料15円、その他10円⁴³⁾となっている。当時の年度毎物価上昇と比較してみると昭和32年は29年の1.04倍となっており①の研究は栄養水準にあてはめれば51円→108円程度が目安と考えられ、もしも108円×8人で算術計算すると、全収入に対する食料費の

3-12-B表 研究にみられる食料費とエンゲル係数の推移

年度	学 校	類 別	生活費A 円	食料費B 円	1人1日 食費 円	A/B (%)	全勤労者 (%)	備 考
29	福 岡	H・P	25,000	12,145	51	48.6	45.5	8 人(職業?)
31	水 農	H・P	79,957	25,746	78	32.2	42.9	} 11 人(農 業)
32	水 農	H・P	57,300	20,055	61	35.0	41.9	
33	福 岡	H・P	31,949	13,760	76	43.1	41.1	6 人(職業?)
35	水 農	H・P	—	—	105	33.0	38.8	} 8月 11月 3月 (人数?) (農 業)
			—	—	78	—		
			—	—	82	—		
38	釜 南	S・P	—	—	67 (4%)	—	36.4	} 150人の調査 結果 (12号P46) より
					76 (18%)			
					82 (50%)			
					100 (20%)			
					113 (8%)			
40	福 岡	H・P	—	—	—	35.8	36.3	6 人(教 員)

註 岩手県高等学校家庭クラブ誌をもとに構成

3-13表 主食、調味料価格の変動

項 目	二 戸 郡 福 岡 町 (昭29)			盛岡市小売店 (昭56. 10月)
主 食	米	1 kg	80円	350円
	ソ ー メ ン	100 g	20円	47円
	大 麦	1 kg	62.5円	265円
	パ ン	1 コ	10円	70円
調 味 料	砂 糖	1 kg	133円	300円
	塩	1 kg	67円	75円
	ソ ー ス	180cc	12.5円	185円
	し ょ う ゆ	180cc	11.0円	58円
	味 噌	1 kg	67.0円	350円

割合は 165%にも達する。以上の例からもわかるが、いかに昭和20年代、30年代の生活が苦しかったか、家計に占める食料費の問題が切実な研究課題であったかを再認識するのである。

(5) おやつ・小屋・夜食

研究の推移 表題のうち特に注目されるのは農村の小屋「コビリ」研究で、昭和31年、32年、42年の3編がある。農業労働が機械化した現在消滅しつつある農村のユイ組織と関連して労働食の変遷を知る上で貴重な記録である

考察 昭和31年—32年度花巻農業高H・P 2年継続研究と、昭和42年度久慈水産高S・Pの研究がある。花巻農の場合、当時一週間分の小屋内容にはぎりめし4回、パン1回、しる粉1回、砂糖湯1回で、久慈水の場合、昭和32年の研究をもとに昭和42年の変化を記録したもの

3-14表 昭和29年1ヶ月間の副食、し好食品購入状況

副 食 の 購 入 状 況						し好品の購入状況									
魚			や さ い		そ の 他										
さば	3回	ト	マ	ト	4回	や	き	ふ	5回	キ	ャ	ン	デ	ー	8回
す	3	き	ゆ	う	4	こ	ん	に	ゃ	3	ア		メ		7
た	1	に	ん	じ	1	ト	コ	ロ	天	2	菓		子		5
か	1	な		す	1	福	神	漬		1	ビ	ス	ケ	ッ	2
ま	1	さ	つ	ま	1	か	ん	詰		1	キ	ャ	ラ	メ	2
目	1										セ	ン	ベ	イ	2
ほ	1										り	ん	ご		2
う	1										サ	イ	ダ	ー	1
千	1										パ		ン		1
小	1										お	盆	用		2
											来	客	用		1
購 入 回 数	12				8				8						27
1ヶ月に占める 購入回数率 30B/A	40%				27%				27%						90%

註 3号「我が家の食物と経済」福岡高校H・Pの研究をもとに筆者が再構成したもの

で、昭和32年当時は栗や稗の粥に漬物、饅頭に甘酒、じゃがいもの塩ゆでに漬物といった組合せから、昭和42年はほとんど既製品となり、申しあわせたようにジュースと袋菓子に変わっていく様子がうかがえる。小昼作りの労働力が軽減されたものの、それを購入する金銭高にあえぐ実態と変わったことも見逃せない。久慈地域の農業労働形態はユイが圧倒的に多く、昭和41年調査農家150世帯中77.1%に及んでおり、一世帯当たり27.3回で、一日平均一世帯当たり4.5人⁴⁴⁾がユイの人数と記録されている。この人達に小昼その他の食事を賄う金額は経済的に大問題であるが、この時代の風潮として手作りよりも既製品を良しとする全般的な見方もあったと思われるが、小昼の内容と質の変化、ユイ労働の変化等を知る貴重な資料である。又砂糖湯が接待用に取り扱われたこと等、当時岩手では未だ砂糖は貴重品的存在であったことがしのばれる。又農協にパン工場ができて小麦粉とパンを引換えに購入できるようになり、パンがおやつとして農村に普及していく様子がわかる。②昭和37年度水沢農業高S・P班は幼児のおやつの研究をしたが、当時3-4歳児で最もよく食べられているのは「焼芋」、5-6歳児は「ビスケット」であった。飲料は牛乳でなく山羊乳を飲ませており、地域農村の特徴がよく出ている。さつまいもの摂取量⁴⁵⁾は昭和25年1人1日76.5gが昭和43年2.4gと激減し、昭和53年10.6gとやや回復しているものの、手軽で栄養価の多いさつまいも他の食品に押されてしまった感があり、幼児食にもっと親しませたいものである。③昭和42年釜石南、水沢高、昭和47年高田高の3人は大学進学、学力向上問題をかかえている普通科生で、夜食の栄養とし好を考えたもので、夜食時間を通して家族とのふれあいを求め、食事と人間関係にも着目した研究である。

お わ り に

以上、第1章においては「岩手県高等学校家庭クラブ連盟発足まで」について述べ、第2章と3章では、「被服領域」と「食物領域」の研究の一部とを取り上げて考察した。

次報(その2)では、第3章食物領域の6節以降と第4章家庭経営・家族関係領域と第5章保育領域について述べることにする。

なお、付表として、①岩手県高等学校家庭クラブの推移の表一事務局校名、成人会長名、会長名、顧問主任教師名の一覧。②主題と関連する社会動向の年表を掲載する予定である。

註

- 1) Home Project の略。
- 2) School Project の略。
- 3), 5) 岩手県における高等学校家庭科の変遷(第2報)一教育課程の変遷を中心として一岩手大学教育学部研究年報 第38巻, P.24, 25。
- 4) 昭和23年12月28日付岩議局第723号。
- 6) 昭和24年度, 家庭科クラブ実施記録(昭和25年4月記)岩手県立盛岡高等学校。
- 7) 現在の久保学園高等学校。
- 8) 現在の県立盛岡工業高等学校, 当時は普通科と工業科の併設校。
- 9) 2~1表参照。
- 10) 内訳 更生6, 幼児服2, 手芸1, 作業着9, 防寒着5(更生1を含む), 老人服3(寒着1を含む), 枕2, 夏物1。
- 11) 総理府統計局「家計調査年報」(全都市勤労者世帯年平均1ヶ月間)。
- 12) 縮み, 摩擦, 耐肥料等についての実験の結果, 化繊が強じんであった。
- 13) 前割, 前合せの形, トルコ民族服から出た名称, 脇, 馬乗りをあける。
- 14) モンベ式, 用便に便利であるようにくふう。下ばきは股引にしている。
- 15) 小川安朗著「民族服飾の生態」東京書籍, 昭和54年。
- 16) 形式が定まったのは「後三年の役」以来だという。
- 17) 小鉄片と革でできている。
- 18) 2)の小札を綴りあわせている革紐又は絹の組紐をいう。
- 19) 式正しきしょうの鑑ともいう。
以上16)~19) 河鱈実英著「有職故実」。
- 20) 洋風でラグラン袖。
- 21) 上衣, みじか形式(和風)袖に襦まわしを入れる。下衣, スラックス(洋風)
- 22) Bをつなげた和洋折衷だが上衣の部分は割烹着風。
- 23) 「防寒衣」と「防寒着」の使い方の統一がないのでクラブ誌の原文のまま載せた。
- 24) この頃まで着用された雪国の防寒着, 四角な毛布の周囲にはマクラメ様の縁飾りがある。
- 25) 当時は蒸気機関車。
- 26) チャドルのこと。イギリス人, オースティン・H・L, イヤード発見, 大英博物館所蔵。
- 27) ニムルドのニムルタ神殿にある。
- 28) 日本では昔, 紙子を用い保温性を増す工夫をしている。
- 29) 脇, 身八つ口の風を防ぎ, かつ布地が経済である。
- 30) 頭から首すじにかけての防寒衣, ボタンで取りはずせる。

- 31) 表地, 綿, 裏地, 毛糸編と重ねて製作する。
- 32) 「主要死因別死亡率の年次推移」岩手百科事典, P. 369。
- 33) 「砂糖の摂取量とウ歯被患率の推移」鷹齋テル, 献立資料。
- 34) 福井忠孝, 栄養学雑誌, Vol. 36, No. 1, 1-2 (1978)。
- 35) 昭和29年度, 3号, 岩手県高等学校家庭クラブ誌, P. 18, P. 19。
- 36), 37), 38), 39) 同上, P. 42, 43, 46, 48。
- 40) 「人間と土の栄養学」鷹齋テル, 樹心社, P. 48~50。
- 41) 同上, P. 214。
- 42) 香川 綾編「三訂補, 食品成分表」1981年版, P. 169。
- 43) 昭和32年度, 6号, 岩手県高等学校家庭クラブ誌, P. 22。
- 44) 昭和42年度, 16号, 岩手県高等学校家庭クラブ誌, P. 35。
- 45) 国民栄養調査, 日本人の食品摂取量年次推移。